



TITLE:

<大會抄録>アフガニスタン國ピアル・ヘル村より見たるアジア史

AUTHOR(S):

勝藤, 猛

CITATION:

勝藤, 猛. <大會抄録>アフガニスタン國ピアル・ヘル村より見たるアジア史. 東洋史研究 1991, 50(3): 483-484

ISSUE DATE:

1991-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154365>

RIGHT:

吏部の存在理由、特簡・保舉制を採用することによって生じる弊害をあげて反論したものの、それとて祖宗の先例を盾にする再反論にあつてあえなく撤回されてしまうのである。

明朝においては吏部権限は大枠での規定はあるが、決して固定したものではなく、内閣と吏部との力關係が大きく作用した。ここにも一連の動きも、官界の状況を利用しながら吏部権限の縮小を圖る内閣の姿を如實に現すものであるとみることが出来る。

東晉の母后臨朝と外戚

安田 二郎

東晉代、一、成帝即位當初、二、穆帝即位當初、三、哀帝晩年、四、孝武帝即位當初と都合四回、皇太后臨朝稱制が實施されており、東晉政治史の特色の一に擧げ得る。しかし、最初の明帝庾太后にしろ、また三度にわたつて國政を裁斷したはずの康帝褚太后にしろ、自身が實權を行使した形跡は認められず、この點は、母后臨朝につきものの官官の活躍が全く見出されない一事にも徴し得よう。その時々における緊要の政治課題に對處するために擇ばれた具體的政策そのものであつたことをうかがわせる。わたくしは、さきごろ、最後の例をとりあげ、謝安によつて強行された褚氏三度目の臨朝が、巨大な勢力を保持する桓氏抑制を目的として實施され、それと同時に成立した謝安政權が、謝安と褚太后との血縁關係を基礎とした一種の外戚政權にほかならないことを論じた。西晉王朝の政

治・社會を律した「親親」が依然として重要な秩序機能を果していたことを示している。が、そのあり方を西晉の外戚と比較した時、ちがいは小さくない。本發表では、さかのぼつて初めの二件をとりあげ、特にその實施に至る前史に注目して分析を加え、該時期外戚の姿を通して、元來「八王集團」に屬する元帝東晉政權の成長という問題を考えてみたい。

アフガニスタン國ピアル・ヘル村より

見たるアジア史

勝藤 猛

一九七〇年に私は東大調査隊の一員として、アフガニスタンの二箇所の農村について、それぞれ異なる一箇月、村内に住んで調査を行った。

記録・大野盛雄(隊長)『アフガニスタンの農村から』(岩波新書)

當時、同國は國王ザーヒル・シャー治下、國內外とも平和

(一)カバビヤン村 同國西部 ヘラート東郊外 タジク族

(二)ピアル・ヘル村 同國東部 カーブル南方 パシクトゥン族

ピアル・ヘル村とその調査の特色

ひとつの村を總體としてとらえるのが調査の目的

都市や村から遠く孤立した村、農村としての性格が鮮やか
二本のカレーズで灌漑される、人口三六五人、これ以上は養えない

い。

村民の母語はバシュトー語、共通語としてベルシア語を使う。文書はない。

調査で知りうることは、村民の誰もが知っていることの一部

現在の農村を總體としてとらえることの意義

むかしの、どこかの農村を、文献から理解する際に、具体的なイメージを作る。